

翻訳

## 第二言語習得におけるリスニング能力促進： 効率の良い学習方法

原文：Vandergrift, L. (1999). Facilitating second language listening comprehension: acquiring successful strategies. *ELT Journal*, 53/3, 168-176.

ラリー・バンダーグリフト  
訳：上田 真理砂

本論では、言語学習や指導におけるリスニングに特に焦点をあてて紹介する。最初に、学習者がリスニングをする時、理解を高めるためにどのようにリスニング・ストラテジー<sup>1)</sup>を用いているか、ということの説明をする。次に、現在までの研究成果を紹介するとともに、どのようにリスニングが指導されているかについても説明する。本論の主要な部分は、すぐに実践可能な教育的事例を紹介し、議論することである。本論の最後には、メタ認知意識を向上させるため、すぐに利用可能なチェックリストもつけてある。

### 序論

リスニングは消極的な言語活動では決してなく、実際には、複雑で活動的な言語活動なのである。聞き手は最初に耳に入ってくる音が、単なる雑音かどうかを聞き分けなくてはならない。そして、その音が意味のある音である場合、語彙や文法構造だけでなく、音の強弱やイントネーションによって変化する意味までも、理解しなければならないのである。さらに、話者の社会的背景から発話の意味を総合的かつ瞬時に理解し、記憶するという事までしなければならないのである。これらの膨大な情報を処理する知的活動は、全て聞き手が担っていることなのである。リスニングとは、かくも高度な作業であり、さらなる研究や分析の対象となるべき分野である。

リスニングは言語学習において、スピーキングに付随する技術などではなく、独立した重要で、基本的な学習内容である。このことは、当初はあまり理解されていなかったが、Dunkel (1991) や Feyten (1991) などの近年の研究では、指導者が教育方法論におけるリスニングの重要性をきちんと理解した上で、リスニングを指導すれば、言語学習におけるリスニングの重要性が明らかになる、としている。Dunkel (1991) は、リスニングの学習は、第二言語習得理論の構築や研究、教授法の指導原理となると明言している。

本論では、「リスニングがどのように言語学習/習得過程を促進するか」、「学習者がリスニング・ストラテジーをどのように用いれば良いか」、「指導者がどのようにこれらのリスニング・ストラテジーを指導すれば良いか」について説明する。

1) 学習者が英語を聞き取る際、理解するための様々で具体的な工夫や行動（翻訳者注）

### リスニングと言語習得

序論でも述べたように、言語学習促進の鍵を握るのはリスニングである。Gary（1975）は、第二言語の指導や習得における初期の段階でリスニングを集中して指導・学習することは、「認知的、効率的、実用的、心理的といった4つの違う利点を伸ばすことが可能である」と指摘している。

1つめは、認知的利点である。聴覚で得た知識を処理し、理解するためには、あることについて自分がそのことを知っているという「知識の認知」が必要である。一方、スピーキングという能力には、「知識の検索」が必要である。学習者が、長期記憶に保存されていない覚えの知識を使って理解しようとすると、認知的には過剰な負担になってしまうのである。このことは、ある言語を習い始めた初期の段階の学習者が正確な意味を聞き取りつつ、なおかつ、同時に正しい発音をするのが困難なことからもわかる。初期の段階での短期記憶の容量では、正確な意味を聞き取りながら、話すための知識を保持することは非常に困難なことなので、スピーキングを強いられた場合、母語の習性に頼らざるを得ないことになる。スピーキングに集中すれば、リスニングが疎かになり、理解力が低下し、結果として意味が分からなくなってしまうのである。

2つめは、効率的利点である。これは、前述した認知的利点と関連しており、使用している教材を用い、書いたり、発話したりといった、いわゆる「生産的な言語活動をいきなり学習者に要求しなければ、言語学習効率はむしろ向上する」というものである。初期の段階において、「学習者が短期記憶内の情報に集中できる環境であればある程、学習効率が高くなる」ということが明らかになっている。これは、言語習得においても例外ではなく、初期段階の学習者が、リスニングのみに集中することがより効果的であることを示唆している。例えば、学習者がお手本となるような音声（指導者の発話や、対象言語を母語とする者の録音された音声）を大量に聞くというリスニングに特化した授業は、非常に言語習得の効率がよく、一方で未熟なクラスメートの発話を聞くといった授業は言語習得の効率が悪いといえる。この点が周知徹底されれば、より効率的な授業展開が可能である。

リスニングを重点的に学習すべき3つめの利点は、実用性が高いということである。一般人の日常生活における言語活動をまとめた Rivers（1984）の研究結果によると、成人は40-50%を「リスニング」に、25-30%を「スピーキング」に、11-16%を「リーディング」に、そして9%を「ライティング」に費やしている。すなわち、「リスニング」は日常生活において最も大きなウェイトを占める言語活動であることがわかる。「スピーキング」では、話者は表情や仕草などの言語学以外のコミュニケーション技能を組み合わせ、自身のペースで話すことができるのに対し、「リスニング」では、聞き手は話者のテンポや単語力などに適合せざるを得ないのである。このことは、リスニング・ストラテジーを指導する上で最も重要な理由であり、たとえ上級者レベルであっても、学習計画に継続的にリスニングを組み込むべきである。

リスニングに重きをおく最後の理由は、心理的利点である。初期の段階でスピーキングのプレッシャーがないということは、特に成人や十代の学習者にとって、困難な発音に対しての気恥ずかしさが軽減されるメリットがある。こういったプレッシャーが無くなることにより、学習者はよりリラックスした状態で、リスニング・ストラテジーや他の言語規則などの習得に集中して取り組むことが可能となる。さらに、たとえ言語学習の初期段階であっても、リスニングに重点を

置くことにより、学習者に達成感や成功感を感じてもらうことが可能なのである。これは、学習を継続する上で、大きな動機付けになる。Rubin (1988) は、ある学生の「僕は、リスニングの練習が好きだ。できた、という気持ちになれる」というコメントを紹介している。

以上をまとめると、リスニングが高度な統合的スキルであることがわかる。言語学習や習得において、リスニングは重要な役割を担っており、他の言語技術の上達にも役立っている。リスニング・ストラテジーの有効性を認識し、効果的に活用すれば、言語学習や習得において、最大限の効果をもたらすことが可能である。

### リスニング・ストラテジー

O'Malley と Chamot (1990) は言語学習ストラテジーの主要部だけでなく、認知理論における言語学習ストラテジーの付随する分類体系も明らかにした。彼らは言語学習における認知的活動範囲を、2つに分類している。それは、「メタ認知ストラテジー」と「認知ストラテジー」である。「メタ認知ストラテジー」とは、言語学習過程を監視し、調整し、管理することである。言語学習過程において、非常に重要なストラテジーではあるが、正しく用いられなければ効果は減退する。一方、「認知ストラテジー」とは、学習教材をうまく利用することや、特定の学習課題に特別な技術を駆使することを指す。さらに、Vandergrift (1997b) は、これら2つの言語学習ストラテジーに3つめのストラテジーである「社会的感情ストラテジー」を加えた。「社会的感情ストラテジー」とは、不安な感情を低減させるための一種の学習方法で、具体的には、学習者が、クラスメートと協力したり、教師に質問したり、不安な感情を払拭するためにちょっとした知恵を使うことである。これら3つのストラテジー分類における各リスニング・ストラテジーのより詳細な定義や例は、Vandergrift (1997b) を参照されたい。

第2言語ストラテジーに関する研究は近年増加したが、リスニングに関する研究は比較的少なく、リスニング・ストラテジー関連の研究となると、さらに少数であると Rubin (1994) は報告している。そんな中でも、O'Malley と Chamot (1990) や Vandergrift (1997b) などの近年の研究では、リスニング能力上位層学習者と下位層学習者におけるリスニング・ストラテジー用法には、違いがあることが明らかになっており、第二言語習得におけるリスニングにおいて「メタ認知ストラテジー」が潜在的に大きな可能性を持っていることが明らかになっている。研究数は限定されているが、リスニング・ストラテジーを指導すれば、リスニング能力が上がることも報告されている。

O'Malley と Chamot (1990) は、リスニング・ストラテジーの重要性を検証するために、中級レベルの高校生を被験者とし、3グループに分けてある実験をした。グループAには、「メタ認知ストラテジー」、「認知ストラテジー」、「社会的感情ストラテジー」の3つのストラテジーを指導し、グループBには、「認知ストラテジー」と「社会的感情ストラテジー」を指導し、統制群には何の指導も与えなかった。その上で、全てのグループが毎日、アカデミック・リスニングをし、小テストを受けた。実験結果は、「認知ストラテジー」と「社会的感情ストラテジー」のみの指導を受けたグループBは、何の指導も受けなかった統制群より、優れた成績であった。また、全てのストラテジー指導を受けたグループAは、4つのテスト中、3つのテストにおいて、最も優れた成績であった。この実験から、学習の初期段階において、リスニング・ストラテジー

を指導することは、学習効果があることが明らかになった。O'MalleyとChamot（1990）は、単に理解を目的とするだけのリスニング課題よりも、学習ストラテジーとリスニング課題を組み合わせさせて指導する方が、より良い学習効果が得られると結論をだした。

複数の種類があるリスニング・ストラテジーの指導効果を比較した研究報告もある。Rubin（1988）は、スペイン語を学習している高校生を被験者として、3グループに分けて実験をした。実験内容は、ビデオを見て内容を理解するもので、実験結果は、全ての仮説が実証された訳ではなかったが、リスニング・ストラテジーを用いることで、より難易度の高い教材でも理解できるということが証明された。特に、小説や劇などの話の展開があるストラテジーに関する指導を受けたグループは、指導を受けなかった統制群よりも、成績が群を抜き優秀であった。以上のことから、Rubin（1988）は、「厳選されたビデオ教材と、効果的な学習ストラテジー習得の組み合わせは、リスニング能力や動機を向上させる」という結論を出している。

次に、Rubin（1996）は、この研究結果を踏まえ、Thomsonとともにリスニングにおける「メタ認知ストラテジー」と「認知ストラテジー」効果の差異を調査した。被験者は、ロシア語を学習している大学生で、事前テストを受けた後、体系的なリスニング・ストラテジーの指導を受けるグループAと、何も指導を受けない統制群の2グループに分けられた。両グループともに、リスニング能力は同程度であった。2年以上に渡る指導の後、録画されたビデオの内容を理解するといった事後テストが行われた。その結果、体系的なリスニング・ストラテジーの指導を受けたグループAの成績は、何の指導も受けなかった統制群と比較して優位差があった。統制群にも成績の上昇は観察されたが、優位差がある程ではなかった。また、「メタ認知ストラテジー」に関しても、統計学的には優位差は立証できなかったが、「メタ認知ストラテジー」を用いることで、学習者はリスニングに取り組みやすいようであった。

研究の数こそ多くはないが、以上の実験結果からいえることは、ストラテジーの指導と活用は、リスニング学習に最大の効果をもたらし、また、リスニング能力を向上させるということである。

#### 学習者へのリスニングストラテジー指導

上記のストラテジー指導の実験結果は、「メタ認知ストラテジー」が学習において大きな役割を果たしていることや、「メタ認知ストラテジー」の有効利用が可能であるということを示唆している。（詳細は、Vandergrift（1997b）の第一言語と第二言語の両方のリファレンスを参照。）ESL（English as a Second Language）やEFL（English as a Foreign Language）を指導する教員は、以上の様々な研究結果を踏まえ、「メタ認知ストラテジー」を学習者に意識させ、その習得を奨励すべきである。Mandelsohn（1994）は、「メタ認知的意識」をどのように指導したら良いか、という問いに対して、トランズアクション・リスニング（学習者がテキストを聞き、情報を把握した上で課題をこなすリスニング）が、効果があるとしている。

#### メタ認知的意識の育成

ESLやEFLの教員は、教室でストラテジーの概念について学習者同士で意見交換させ合い、「英語を理解する時に、実際には様々なストラテジーを使っている」ということを、気付かせることが重要である。1つの方法としては、まず英語以外の、学習者の知らない言語でリスニング

をさせ、その意味を推測させる。次に、何故そう推測したのかについて、意見を交換させ合うことで「メタ認知的意識」を意識させるのである。Mendelsohn（1994）によれば、このような指導法は、リスニングは、「色々なヒントを使いながら聞くのだ」ということを意識させる良い学習法であるとしている。これは、母語を聞く時には、自然とリスニング・ストラテジーを活用出来ているのにも関わらず、他の言語を学習している時にはそれができない学習者に、特に役に立つと指摘している。また、この指導法は、重要な「メタ認知ストラテジー」の1つである「必要な箇所だけに注意して聞けば良い」という、「識別ストラテジー」の育成にも効果があるとしている。

#### リスニング前後の課題の統合

教育学的な観点からいえば、「体系的なリスニング前後の課題」というのは、とりわけ新しい考えではない。例えば、Underwood（1989）は、今から20年も前に、教育学的な観点からの「体系的リスニング前後の課題」について述べている。しかし、残念なことにこの体系的指導法は、常には実践されていないのが現状である。もし常に指導されているならば、学習者のリスニング能力はより向上し、「メタ認知ストラテジー（計画、監視、評価）」の習得がもっと進んでいるはずである。

#### リスニングの課題をうまくこなす手順の指導

リスニング前に行う課題は、第二言語習得の成功の秘訣である。リスニング前に課題をこなすという段階で重要なことは、教師が学習者に対して、「これからどんな内容を聞くのか」「何をすべきか」といったことに対する心の準備をさせることである。まず最初に、学習者は、これから聞く内容に関して意識する必要がある。具体的には、自身が知っている知識や、聞く内容の種類によって異なる「どのように情報が構成されているか」という知識、またそれに関連する全ての文化的知識や情報などが挙げられる。次に、リスニングの目的を明確に把握する必要がある。聞く目的を明確にすることで、学習者は、「どういった情報に注意して聞けばよいか」「どこまで詳細に留意して聞けばよいか」などといったことが整理できるからである。これら全ての情報や、知識を意識的に使うことによって、これから聞く内容に対して、必要な手段を講ずることができるのである。

学習者は、リスニング前の課題を行うことにより、「これから何を聞くのか」ということが認識でき、意味を把握するためには「何に集中して聞けばよいか」ということが理解できる。個々のリスニング・スタイルを奨励し、リスニング・ストラテジーを自主的に駆使する能力を育成する効果的な方法として、課題を始める前に、クラス全体または、2人1組で意見を交換させ合うことが有効である。これは、同じ課題に取り組むのであっても、「リスニング前の準備の仕方は個々によって異なる」ということを認識させるためである。

#### リスニング中の自己評価法の指導

学習者は、リスニング中に継続的に自己評価をする必要がある。例えば、「理解度はどうか」「きちんとストラテジーを有効に活用して、リスニングをしているか」「聞いている内容に一貫性

があるか」などが挙げられる。一貫性については、次の2種類がある。

- (1) 予測した内容との一貫性
- (2) 聞いている内容と自分の理解が合致しているかどうかの一貫性

リスニングの特性は、学習者のペースで理解できるまで読み返したり、時間をおいてからでも読めるといったリーディングの特性とは異なる。そのため、教員が、「学習者がリスニング中に自己評価をしているかどうか」ということを観察、把握することは、実質的には不可能である。しかし、判断を下す技術やストラテジー用法の定期的な練習は、学習者の推測技術を育成し、より効果的な自己評価に役立つ。ここでいうストラテジー用法の練習とは、論理的に推測することや詳細情報、背景的知識の適切な用法を指す。ここまでの詳細は、Mendelsohn (1994, 81-115頁)に詳しい。またリスニングには、語源の知識も必要である。さらに、Willing (1989, 127-38頁)は、言語学習における全てのレベルに必要な推測能力を伸ばす方法について、非常に役立つ例をいくつか紹介している。

必要な部分だけを聞く「計画ストラテジー」と推測の確認のために聞く「チェック・ストラテジー」の両方を上達させる良い方法は、口頭版のクローズ・テストを利用することである。学習者は、リスニング開始前に、虫食いのクローズ・テストをまず読む。読みながら、虫食い部分を推測するのである。これは、「文脈から推測する能力」と、「これから聞くであろう語句を予測する能力」の向上に繋がる。また、たとえ推測が難しい語句や迷った語句があったとしても、リスニング前に、クラス全体や2人1組での意見交換を行うことで、対応が可能である。

このようにリスニング開始前に、準備を整えてからリスニングをすれば、「計画ストラテジー」や「チェック・ストラテジー」の両方を発達させることができる。また、この課題の延長として、学習者同士で、意見交換させ合うことにより、「メタ認知ストラテジー（計画、チェック、評価）」のひとつである「評価ストラテジー」を指導することができる。

#### リスニングの課題への取り組み方と結果を考えさせることの指導

学習者は、リスニングの課題をしている最中に、「自身が下している判断が妥当なものかどうか」を考える必要がある。一方、教師は、学習者各々が用いたストラテジーについて、自己評価をさせることにより、その重要性を指導する必要がある。また、グループやクラスで、学習者によって異なるリスニングの課題への取り組み方について、意見交換をさせ合うことでも、自己評価の重要性を指導できる。教員は、個々のリスニングの課題への取り組み方について、学習者同士が意見交換することを奨励しなければならない。例えば、リスニング前の準備段階では、理解が及ばなかったことであっても、結果としては意味を理解できた学習者に、「どのようにして意味の推測をしたか」「ストラテジーをどのように活用したのか」などについて発表させるといったことは、有意義な指導である。

#### リスニングチェックリストの応用と用法

学習者を常に「計画・チェック・評価」に集中させるために、教員が、リスニング理解度テスト

トの前後に、付録1や付録2のようなチェックリストを導入することも一案である。ある特定のリスニング課題の準備をさせることもできるし、課題後は、理解できたかどうかといった結果を評価することもできる。

最初に、付録1を利用することで、学習者にリスニングの課題前に様々な認知的準備をさせることが可能であるし、さらに、リスニング後は自己評価をさせることも可能である。具体的には、リスニング前の準備終了時に、学習者に「リスニング前」のチェックリストを全項目記入させる。リスニング課題後も同様に、「リスニング後」のチェックリストを記入させる。チェックリストに記入することによって、学習者は、自らのリスニングを体系的に評価することが可能になる。特に、理解出来なかった課題があった場合、このリスニング後のチェックリストには特段の効果がある。2回目のリスニングを開始する前に、この自己評価方法を行うと、学習者は自身のリスニング・ストラテジーを調整できるので有効である。チェックリストの最後に、次回リスニングをする際の抱負を書かせる箇所があるが、個々の学習者を励まし、次回の自身のリスニングについて、「具体的にどのように改善したらよいか」について考えさせる良い機会となる。

このチェックリストは、必要に応じて修正可能であり、学習者のレベルに応じて教員が項目数を減らすこともできる。また、学習者全員の母語が同じ場合は、母語に翻訳しても構わない。さらに、チェックリストを繰り返し利用するのであれば、「はい」の欄を複数作成すれば良い。（その場合は、コメントを書く箇所を用紙の裏面に印刷する。）このチェックリストを用いれば、学習者のリスニング学習の経過や推移を時系列で記録することが可能である。

次に、付録2を用いれば、リスニング前の準備課題を行わずとも、学習者のリスニング・ストラテジーを向上させることが可能である。例えば、ラジオやテレビを聞いて理解するといった実用的なリスニング技術の向上には、細部の理解と同様に、大筋を理解できるリスニング・ストラテジーを向上させるための学習が必要である。そこでまず、リスニング前の準備課題を一切行わずに音声を聞かせ、概要を把握させる。初回のリスニング後に、付録2の表の中の「推測」や「理由」の欄に「何故そう思ったのか」という理由を記入させる。

その後、学習者に、クラスメートと自分の表を比較し、違いについて意見交換をさせる。これは、2回目にリスニングする際は、1回目とは違った角度からリスニングをさせるというのが目的である。2回目のリスニングとクラスメートとの意見交換後に、教員は、「どういった点に留意して聞くべきか」、「意識しながらリスニングをするということは、重要なことである」ということを学習者に指導する。

チェックリストを利用することで、学習者はリスニングのプロセスや、ストラテジーを効果的に用いることを常に意識するようになる。答えを聞き取るためだけのリスニングだけでなく、リスニングのプロセスにも留意して聞くことで、「学習態度を省みること」、「ストラテジーを常に調整すること」ができることと期待される。

## 結論

リスニング・ストラテジーの効用やリスニングを重点的に指導することで、「リーディング」や「リスニング」といった言語のインプットに関する最大限の学習成果が望める。より信頼でき、心理的なストレスが少しでも少ない学習ストラテジーは、学習成果を多に上げるのに役立つ

「道具」なのである。特に言語学習の初期段階であっても、リスニング・ストラテジーを用いれば、実社会で実際に使用されている実用的で高度な内容の教材であっても、理解が容易になり、リスニングがよりいっそう楽しいものとなる。留意すべき点は、実用的なリスニング・ストラテジーの指導は、評価の対象とならない状況で行われるのが理想的であるということである。というのは、往々にして、教員はリスニングを学習者のリスニング能力を評価するために用いる場合が多いが、評価が伴う場でリスニング・ストラテジーの指導が行われると、学習者は不安や心配を覚えてしまう。実用的なリスニング・ストラテジーを習得させることが目的であれば、評価がともなう状況での指導は、好ましいとはいえない。

本論では、言語学習指導の中でも、とりわけ、リスニングに焦点をあてて、認知的、能率的、実用的、効果的の4つの利点について述べた。また、リスニングにとって、「メタ認知ストラテジー」が欠かすことのできないものであることや、これらのストラテジーは指導可能であることについて述べた。最後に、本論には、具体的でわかりやすいストラテジー指導のために、リスニング・ストラテジーの習得に関する具体的で、教室で利用可能なチェックリストを付録として添付している。

#### 注

- 1) インタラクティブ・リスニング（聞き手の目の前に、話し手がいる双方向的状況で、聞き手は、より積極的にリスニングできる）におけるレセプション・ストラテジー指導時の手順に関しては、Vandergrift (1997b) を参照のこと。
- 2) この教育的手順の理論は一般に良く知られているが、Mendelsohn（出版予定<sup>2)</sup>）は理論と実践には大きな隔りがあるとしている。最近の教科書を対象にした研究の中で、Mendelsohnは大半の教科書において、ストラテジーに関する記述はほとんど無いか皆無であると発表している。また、リスニング・ストラテジーの役割や有効性についての記述がある教科書は非常に少ないと報告している。

#### 参考文献<sup>3)</sup>

- Dunkel, P. A. 1991. 'Listening in the native and second/foreign language: Toward an integration of research and practice'. *TESOL Quarterly* 25/3: 431-57.
- Feyten, C. M. 1991. 'The power of listening ability: An overlooked dimension in language acquisition'. *Modern Language Journal* 75/2: 173-80.
- Gary, J. O. 1975. 'Delayed oral practice in initial stages of second language learning' in W. C. Ritchie (ed.). *Second language acquisition research: Issues and implications*. New York: Academic Press.
- Mendelsohn, D. 1994. *Learning to listen: A strategy-based approach for the second-language learner*. San Diego, CA: Dominie.
- Mendelsohn, D. (Forthcoming<sup>4)</sup>). 'Teaching listening'. *Annual Review of Applied Linguistics*.
- O'Mally, J. M. and A. U. Chamot. 1990. *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge University Press.
- Rivers, W. 1984. 'What practitioners say about listening: Research implications for the classroom' in R. A. Gilman and L. M. Moody. 1984. *Foreign Language Annals* 17/4: 331-4.
- Rubin, J. 1988. 'Improving foreign language listening comprehension' (Project No. 017AH70028).

2) 論文発表当時は、出版予定であったが、1998年に出版されている。

3) 原文ママ（参考文献はAPA styleで記されておらず。）

4) 論文発表当時は、出版予定であったが、1998年に出版されている。